

## 青空の下で 生ごみ研あさか ーなごみ農園ー



NPO「青空の下で 生ごみ研あさか」のなごみ農園は、東武東上線 朝霞台駅北口 JR武蔵野線北朝霞駅から東洋大学方面へ徒歩5分(坂道を下る 産業文化センター向かいの朝霞消防署浜崎分署の裏)の便の良いところにあります。

ここは、「朝霞市の生ごみ類は燃やさない」「資源化して地元の土に返し、循環させる」「朝霞市でとれた地元の旬の野菜を(規格外も含め)食べよう」・・・という目標に向かって進むための、地域循環実践の場であり、拠点でもあります。

家庭から生ごみを持ち寄り、落葉や米ヌカなどと混ぜながら、コンポスターと寝かせ床で堆肥化し、共同で野菜作り(無農薬・無化学肥料)をしています。

「首都近郊で、都市化はすすんでいるが、まだ、田畑が存続している地域で、どれだけのことができるのか」その条件を活かしてできることもあるはず、と朝霞市内を中心に多様なつながりを築きながら、実践を積み重ねています。



なごみ農園での実践でできた「循環の輪」を、朝霞市内に広げ、朝霞市の生ごみ・落葉類は一切焼却には回らないようにしたい、さらに、同じような方向を持つ団体などと、連携しながら埼玉県じゅうに、さらに首都圏へと広げて行きたい、と願いながら。

NPO「青空の下で 生ごみ研あさか」は、平成20年1月に設立しましたが、前史として7年間の

「朝霞市生ごみ等減量・資源化研究会」の活動があります。

その経緯は、下記の文にあります。

## **朝霞市生ごみ等減量・資源化研究会は平成20年4月から『青空の下で 生ごみ研あさか』に変わります**

平成13年4月より、朝霞市の行政事業として現実験農場(現在のなごみ農園)を借り上げた。

H13年度に生ごみ処理機への助成申請者に対し市長名でアンケート調査を行い、そのアンケートに答えた市民に呼びかけ、さらにH14年に広報あさかによりボランティアを公募。その年の9月に設立総会を開催し「朝霞市生ごみ等減量・資源化研究会」が正式に発足した。

H13、14年は緑肥類により土の改良を試みる。また盛土による農地であった為産廃などの混入が多く、コンクリート瓦礫、3mに及ぶ鉄筋、タイヤ、石などの除去、手作業による除草が殆どどの活動であった。

H14年には主な農作業道具の購入、H15年には家庭用小型耕運機の購入と道具類は整ってきた。

H16年から運営メンバーが変わり、会員と行政の根本的な部分の擦り合せに多くの時間を割き、男性の応援が増えたこと、啓発・広報活動に力をいれたこと、実験農場に大きな看板を作製し黒目川を散策される方に認知いただける努力など、活動もスムーズとなり最大63名の会員となることが出来た



H20年度から、会員制のNPOとなったことで、新たな課題が続出しましたが、春の黒目川花まつりに出展して、「あさかの野菜をいっぱい食べよう」を掲げ、地元生産者や地元市民団体との連携がすすみました。「秋の交流会」のピーナッツ掘り事業などには、

若夫婦と子どもたちが想定以上にたくさん参加してくれました。また、豊島区の「みんなのえんがわ池袋」との連





携がうまれるなど、広がりが出てきて、自由で新しい活動に生まれ変わってきています。

この秋(平成20年)朝霞市の公共施設、公園などの大量の落葉を引き受け、堆肥化するという行政との連携もさらに進んできました。



## 「青空の下で 生ごみ研あさか 一なごみ農園」の今まで

野口 久美子 (代表)

「朝霞市生ごみ等減量・資源化研究会」は、平成13年4月に清掃業務課が、「生ごみ等の減量をいかにするか」「生ごみ等をどのように活用するか」を目的とした拠点として「実験農場」を借り上げ、準備会を経て、「行政と市民ボランティアの協働事業」として14年9月に始まりました。

はじめは何をして良いのか全然わかりませんでした。取りあえず私たちに出れることとして①実験農場に会員の家庭の生ごみ等を持寄ろう②コンポストによる堆肥づくり③荒れた畑の整備(産業廃棄物の残土による盛土の畑だったため、タイヤ、チューブ、鉄筋、コンクリートの塊、石などが山ほど混入していた)の3点から取組み始めました。除去するのに小石までとすると2~3年かかったと思います。作業の人数は5~6名から始まり、1~2名という時期もありました。

初めてのコンポストで集めた生ごみは見事に失敗。仕方なく穴を掘って埋め込みました。その後農家の方に発酵が始まっていた2年物の木のチップを分けていただき、発酵を促す方法も徐々に進化。その後新しい木のチップを購入し自分たちで鶏糞や米ぬか、発酵種菌を別々に購入した時期もありました。その後自分たちの知識の向上を図るための勉強会や先人たちの現場を見学させていただくなど自分たちの活動にあった手段を探っていくことを重ね、彩の国コンポストにたどり着き、発酵チップ材の代わりに県土(県土木整備事務所)の彩の国コンポスト堆肥(無料)を発酵促進剤として使用することにいたしました。米ぬか(無料)は富士見市のお米屋さん、落葉も2回ほどの会員によるケヤキ並木の落葉掃きの他公



民館・図書館・大型マンションに協力いただき、それを1年分として落葉・米ぬか・彩の国コンポストと落葉専用の箱でサンドイッチ状にして保管。1次保管場所としてコンポストで収積した生ごみ類を前述の落ち葉専用箱のものと併せて、2次発酵を促すための寝かせ床から本格的な発酵準備が始まります。寝かせ床(箱)は5個準備されており、好気性の発酵菌利用のため何回か切り返しを兼ね、隣の箱に移していきます。はじめの頃は切り返しのシステムが未熟なため戸惑いが多くありましたが、序々にシステムも成長。5番目の箱は成分分析によって完熟の堆肥としてほぼ完ぺきな成分であることが証明されました。

現在、2次発酵では、発酵を促す為に約半年から1年の間に3~4回程の切り返しを行なってようやく堆肥ができあがります。システムの未熟から、堆肥の寝かせ床の順番を間違えて畑に投入、といっても今年の3月使用のものまでは、発酵不足のためか畑土にうね込み後発酵してしまうという状況も経験してきました。失敗を重ねていたそのころ2月に寝かせ箱の覆いを覗いたとき、発酵菌が真っ白に光っていたことは忘れられない感激でした。



あの瓦礫だらけでバクテリアさえもいなかったであろう、化学肥料で辛うじて生産されてきた固いパサパサの畑の土は、今や足首まで埋まろうかというほどホカホカの土に生まれ変わり、大根など真綿に包まれているように温かな顔をしています。

生ごみ研究会では生ごみ収集への1つのきっかけとして、エコリサの方にご紹介いただいたお茶の水切り袋を「生ごみ袋」に昇格。三角コーナーやシンクに取り付けられたごみ受けの変わりにこの袋を使っていただき、生ごみの80%が水であることの啓発と同時に日常的に使用することによってビニールの小袋等、細かい分別が将来の生ごみ類分別収集に備えられればと考えております。これからも課題はたくさんありますが1つ1つ会の経験の中から、生ごみ類(生物類=バイオマス)を焼却処分することへの余りにも大きな環境負荷を知らせ、さらに資源としての価値を、お知らせしていかなければなりません。

現在「青空の下で」は清掃業務の単なる生ごみ等の減量を知らせる啓発活動だけでなく、公園緑地・道路管理・都市計画などまた落ち葉掃きグループや園芸家の方々との接点を持ち、園芸企業、生ごみ処理業者との関係を深くし、先ほどのバイオマスの焼却処分の廃止・資源化に向け動き出しました。このことの大切さをどうしたら市民の方々に伝えられるか、研究を重ねていきたいとおもいます。



前身の「朝霞市生ごみ等減量・資源化研究会」はH19年度末をもって、成果を見たとのことで第一次事業終了となりましたが、「生ごみを焼却しない」この一点にだけでも皆さん反応は速く、できるだけ協力をするとの声が高まってきております。現在の問題点の第一番は労働力としての人材です。

この部分と車両関係は問題点が起きた時にボランティアさんをお願いしておりますが、これから先のことを考えると、たくさんの方のご協力が必要となってまいります。行政の方も協力体制をとるよう動いて下さることも見えてまいりました。頭脳、農業、料理、食育、販売、広報、パソコン。お手伝い頂ける方、会員となって大きな課題と一緒に取り組んでいただきたい。そう願っているもうひとつ大きくならうとしている「青空の下で」です。

もう一つの課題は「金銭面」です。寄付や助成もぜひお願いしたい件ですが、そこに頼らず、気持ちを一つにした市民・企業・行政、そして我々の啓発を兼ねた事業によって賄っていくことこそが理想と考えております。

市民活動として一年生の「青空の下で」に是非応援して下さいますよう、お願いいたします。



「彩の国コンポスト」とは

詳しくは埼玉県のホームページ → 県土整備部 → さいたま県土整備事務所トップページ を見てください。



なごみ農園に集まったこの秋の落葉→

公共施設、公園、大型マンションなどから

## —— 青空の下で 生ごみ研究会あさか 《なごみ農園》 ——

皆様へのメッセージ

「青空の下で 生ごみ研究会あさか」は、生ごみ類（生ごみの他、落葉、剪定枝チップなどの資源となる生物由来の物質＝バイオマス）循環を環境問題の中で最も生活に直結した、持続可能な循環システムと位置付け、「なごみ農園」を拠点に活動してまいります。

朝霞市を中心に、優しく温かな土や水に育まれる風土、草木の緑に人間性を養わんと、青空の下で老若男女・健病障共に穏やかに、にこやかに過ごすイメージを膨らませ、首都20～30km圏の田園都市として、誰もが参加できるプログラムを作成、土豊か = 心豊かなまちづくりを目指し、地域貢献してまいります。

### 《 生ごみ3Mの推進 》

Mottainai 「もったいない」

Moyasanai 「燃やさない」

Mouitidoikasou 「もう1度生かそう」



《平成21年2月作成》

\*くわしくは、埼玉エコ・リサイクル連絡会 資源循環委員会にお問い合わせください。